

<JAC アワードをいただいて>

初めまして、東北新社の青木と言います。

私は 2017 年にリマーカブル・プロダクションマネージャー・オブ・ザ・イヤーを頂きました。

PM になってから程なくして、大きい仕事や、聞いたらわかるような作品を運良く担当させていただく機会も多かったのですが、元々私は別職種から現在の東北新社に転職し、PM としてスタートを切ったのも 20 代後半。新卒で PM となった人たちに比べて遅かったということに、なんとなく引け目を感じていたこともあり、まあこういった賞は自分には縁がないようなことだろうなと思っていました。

受賞した年の応募が始まった時も先述の通りで、今年は誰が出すのかな？とか、そんなぐらいに思っていた折に、上長から出してみないかと声をかけてもらいました。

年齢制限はとうにこえていましたが、もう一つの経験年数で言うと最後の年だということもあり、正直なところ、出すならせめてファイナリストぐらいに残ると嬉しいなというささやかな欲を内心に秘め、応募させてもらいました。

結果、目標だったファイナリストに残り、この身に余るオブ・ザ・イヤーまで頂くことができました。

(担当していたシリーズ作品が同年に ACC グランプリを受賞したと言うことがかなり大きな後押しとなったというのは言うまでも無くですが笑)

私の場合、正直、芸人の方の賞レースや文学賞のように、受賞した翌日から劇的に人生や仕事が変わったと言うことは、残念ながらありませんでした。逆にその後の制作業のハードルが上がったくらいです笑

ただ、受賞直後から、会社内外、仕事関係以外の方からも本当にたくさんの方にお祝いの言葉をいただいたことが、今の仕事の大きな糧になっていることは間違いありません。それは人生でも 1、2 を争う嬉しい記憶です。また、応募に際して、自分がしてきたことの何が評価されるだろうか。と考える時間は非常に有意義だったと感じます。

もちろん出すからには受賞を！という意気込みは大事ですが、

そこまで気負いせず、おまけがあるかな？ぐらいの気持ちで。

今の仕事と、自分と向き合う、ひとつのいい機会として応募をしてもらえると嬉しいです。

東北新社

青木卓郎